共同研究「現代政治研究の新潮流」2014年度活動報告

渡　部　　純

今年度は、政治学研究の中でも特に地方政治研究に焦点を当ててみることにした。注目したのは、ポピュリズムという問題である。

2000年代に入ってから、既成政党・官僚制に対する強い批判を示しながら大胆な改革方針を掲げて、ポピュリスト政治家が何人も登場している。その登場の舞台となったのは、多く、地方政治の首長選挙であったが、彼らの言動は、中央政治に対しても大きな揺さぶりをかけるものであった。その代表は大阪の橋下徹であるが、07年からブームを生んだ彼の運動も、2014年の総選挙では、必ずしも大きな波を生むまでには至らなかった。

このような現象を理論的に考察するために、我々は、既存の政治学の成果を次の三つの形に集約して確認し、近年の新傾向にアプローチする足場を構築することにした。

①90年代からの様々な制度改革が、地方政治レヴェルではいかなる結果を引き起こしたか

②地方政治が中央政治に影響を与える回路には、いかなるものがあるのか

③アメリカにおいては、住民主導の運動は、いかなる形態をとり、いかなる成果を上げているか

そして、各論点について、研究会メンバー相互の検討を踏まえて、日本における代表的な研究者を招いた研究会を開催した。①については広島大学教授川崎信文氏（２月26日）、②については大阪大学教授北村亘氏（２月24日）、③については福山大学教授前山総一郎氏（２月25日）である。いずれも少人数での研究会となったため、毎回、熱のこもった議論を展開することができた。

また、それと併行して、尾道、竹原、世羅、三次といった小地方都市において、地方から中央に向けていかなる政策が発信されているかを実地に調査してみることにした。これは、川崎氏と前山氏からの示唆を受けてのものである。東京にいるのではわからない地方の現場の姿・声を確認できたのは、大きな収穫であった。

風行社から2015年３月に刊行された『初めての政治学（改訂版）』と『政治学の扉』の二著は、この共同研究の成果の一部である。